

World Watching 258

ワールド・ウォッチング

フィリピンから世界へ 人材育成と活躍



ODA継続受注

1980年～90年代は、フィリピン全土へ展開するODA無償援助の橋梁建設工事シリーズ複数件、フィリピン事業の根幹となっていくODA有償援助のアグノ河川改修工事、オルモック洪水対策工事、マニラ首都圏の洪水対策工事、得意とする海上工事のセブ埋立工事と継続して受注していくこととなる。その間にフィリピン船員のみならず、エンジニア（土木・建築技術者）・スーパーバイザー（監督・世話役）・メカニカルエンジニア（機械技術者）・鳶工・鍛冶工・オペレーター等の職員・作業員も立派な戦力となり、日本人職員・フィリピン人職員共に充実しフィリピンでの黄金期を形成していくことになる。

2000年代に入って日本の特別円借款第1号であるミンダナオコンテナターミナル建設工事を受注でき、ODA無償援助の橋梁建設工事のシリーズに加え本邦技術活用案件（STEP）により整備される緊急橋梁建設工事3件（南部ルソン、北部ルソン、ビサヤ地区）受注、洪水対策工事のプレゼンスを確固たるものとしていくラオアグ河川改修工事等の大型ODA案件の受注が続いた。

そのころには、フィリピン人従業員も700人を超える大所帯となり、勤続20年を超える職員もあり、先輩が後輩を指導し、日本式の現場管理をフィリピン人同士で行えるように成長していき、なんとも頼もしさを感じていた時期でもある。



フィリピンから海外へ

1997年にカンボジア、2004年にベトナム、2006年にインドネシア、2014年にミャンマーと4か国に営業所を開設し、2010年代にそれぞれの国でODAの港湾工事を受注していくことになる。2013年竣工のカイメップ国際コンテナターミナル建設（ベトナム）、2014年竣工のタンジュンプリオク港（インドネシア）、2016年竣工のモンバサ港コンテナターミナル建設工事I期、2018年竣工のシハヌークビル多目的ターミナル（カンボジア）、2019年竣工のティラワ港コンテナターミナル（ミャンマー）、現在施工中のパティンバン港開発（インドネシア）等、フィリピン以外の国へ積極的に展開していく。この海外展開過程において、大いに活躍しているのがフィリピンで育ったエンジニア・スーパーバイ



今井 清吾

東洋建設株式会社
国際支店営業部



はじめに

当社は、1973年にフィリピンに拠点を開設し、ナボタス漁港建設工事を受注して以来50年近くになる。その後1997年にはプノンペン、2004年ハノイ、2006年ジャカルタ、2012年にはケニアでモンバサ港コンテナターミナル建設工事（I期）を受注し、2014年にミャンマーに拠点を開設し、現在に至っている。その間、最大・最重要拠点のフィリピンにおいて共に成長してきたフィリピン人職員と共に海外事業の拡大を図ってきた。これまでに行ってきたフィリピン人職員の育成とそのフィリピン人の活躍について以下に紹介したい。



フィリピン進出

1973年にフィリピンへ進出し最初の仕事がナボタス漁港建設工事施工（1974年竣工）（写真1）である。日本から自社浚渫船「千代田丸」をフィリピンへ持ち込み、雇用したフィリピン人船員に対して、日本人船員が直接操船技術や機関技術等を指導し甲板員や機関員の育成を図った。教育する側（日本人船員）もされる側（フィリピン人船員）も手探り状態での試みであったが、この時のフィリピン人船員がその後の海外事業を背負っていくことになり（写真2）、今につながる直営施工体制の礎を作りあげた。



写真1 ナボタス漁港全景



1974.
写真2 千代田丸乗組員
（日本人13人、比人20人）



写真3 エンジニアへの指導



写真4 現場での指導



写真5 鋼矢板打設



写真6 鋼矢板打設指導



写真7 モンバサ港コンテナターミナル



写真8 多国籍メンバーの打合せ



写真9 作業打合せ



写真10 溶接指導

ザーや種々の作業員である。自らの活躍はもとより、積極的に現地の人々に技術を教えていく様は、さすがにフィリピン人のホスピタリティーだと感心する。

管理を体感した彼らや彼女らが、フィリピンはもとより、現在展開している各国での事業で、マネージャーとして活躍する日もそう遠くないと感じている。写真12は現在日本で現場研修中の女性2名（フィリピン人・ケニア人）の姿である。



フィリピン人の活躍

次に、フィリピン人の活躍ぶりを紹介していく。

インドネシアでは、2件のODA港湾工事を通じて、得意とする海上工事においてフィリピン人の活躍が見られる。日本人も当然指導していくわけだが、日本式の現場管理を十二分に理解しているフィリピン人職員がインドネシア人職員を手取り足取り指導していく（写真3～6）。

2012年に受注したケニアのモンバサ港コンテナターミナル建設工事（写真7）により、海外事業のフィールドが拡大、グローバル化が加速していく。そこにもやはりフィリピン人職員の頑張りは欠かせない。最盛期には100人近いフィリピン人職員が日本人職員と共に現場に従事し、自らが活躍するだけでなく、現地職員や現地業者の指導に当たっていく姿は、国境を越えて日本のODAの役割や価値を高めていっていることを実感する（写真8～10）。

2015年には、さらにそのフィールドを最後のフロンティアと呼ばれていたミャンマーにも広げた。ここでは、ODA無償案件の橋梁工事に続いて受注したODA有償工事のティラワ港コンテナターミナル建設工事でのフィリピン人職員の活躍ぶりを紹介する。特に初進出国では、フィリピン人職員のパフォーマンスに依存するところが大きく、日本人職員と共に日本式の現場管理の指導をしていく役割を担っている。様々な安全講習（写真11）も取り入れミャンマー人職員や作業員へ、工事の基本となる安全管理や品質管理を教え込んで現場の質を上げていった。また、ミャンマーでは建築事業への展開を図るために、ミャンマー人職員を建築事業のベースがあるフィリピンで研修する等の取組も実施しており、その研修生がコンテナターミナルの建築工事で活躍した。フィリピン人職員が海外で活躍するだけでなくフィリピンが第三国人を教育するベース基地にもなっている。

一方国際支店においても研修制度を設け、フィリピン人やケニア人の土木職や建築職等に、日本の現場を体感できる機会を設けている。日本でのきめ細かい施工



写真11 現場での安全講習



写真12 日本現場研修



おわりに

日本とフィリピンは、戦争という過去の不幸を背負いながらも1970年代に対日感情改善が見られ出してから、一貫して良好な関係を続けている。近年においてもドゥテルテ政権のリーダーシップによるビルド・ビルド・ビルドと銘打った強烈的なインフラ投資の推進に日本政府も大きな後押しを行い、2017年に日比両政府で結ばれた「今後5年間の二国間協力に関する日・フィリピン共同声明」の確実な履行も手伝い、コロナ禍においても大きな成果を上げており、日本の企業の活躍の場が増している。フィリピン人は英語のみならず各国現地語の取得能力も非常に高く目を見張るものがある。持ち前の器用さも加わり技術的側面においても、これまでの説明のように当社のフィリピン事業のみならず、他国も含めた海外事業発展に大きく寄与している。また、長く勤めるベテランフィリピン人職員は日本人若手職員の育成にも寄与している面も大きく英文契約書や図面の理解について説明や相談において先輩日本人職員の代わりに務められるような職員もいるのが心強い。フィリピン人の指導の仕方は見ていてどこか楽しそうで、そのほうが呑み込みも早そうに感じることもある。ただ甘えや油断は事故の元なので緊張感が必要であり、バランスの良い指導というものを考えさせられるきっかけになったりもする。近年においては、BIM・CIMやCAD分野等において日本での業務においても大きく貢献しており、大切なパートナーであり今後も共に発展していくことになるだろう。